

編集委員会からの新年の挨拶

編集委員長 若菜 弘充

ご購入ありがとうございます。Space Japan Review 誌の編集委員長の若菜弘充です。印刷誌からウェブ版に切り替えてすでに4年近くになりますが、何とか定期発行を続けてこられたのも読者の皆様のご支援と編集委員の方々のご協力によるものと感謝いたします。ウェブ版の最初のページは、月に約600回近くのアクセスがあります(編集委員によるアクセスも含まれていますが)。アクセスしていただいた方が、掲載されている記事をすべて興味深く読んでいただけるように魅力ある誌面にしていきたいと思っております。昨年は様々な自然災害が世界的な規模で発生しましたが、被害軽減のため自然に対して物理的な力で対抗するのでは限界があります。迅速かつ正確な情報伝達こそが有効な対抗策で、衛星通信には現状の利用形態以上に潜在的な力があると信じています。途上国における医療や教育など多くの問題の解決手段としても、今以上に、また新たな形態で利用が広がっていいと思っております。様々な視点で見直した新しい記事による誌面を作りたいと思っております。本年もよろしくお願いいたします。

飯田 尚志

スペース・ジャパン・レビュー(SJR)も創刊より今年で6年目に入ります。創刊当初に描いた SJR 編集の基本コンセプトは次のようなものでした。

- ◆ SF 的な空論は排す(純粋な技術・学術理論および実用の探究)
- ◆ 研究(R&D), 技術(Engineering), 産業(Business)のいずれにも偏らない
- ◆ ボーダーレス時代に対応したグローバル・スタンダードの追求を通じて, 衛星通信分野全般の繁荣を支援
- ◆ 言論・報道の自由と中立を遵守し, あらゆる圧力を除外
- ◆ データバンク部門を強化(アンケートや実態調査等)
- ◆ 読者が参加しやすい誌上環境を整える(誌上相談室など)
- ◆ 学会誌であると同時にオピニオン誌・衛星通信の分野で活躍する気鋭の論客を多く登場させる(インタビュー, 対談, 論文)
- ◆ 編集部は来る人拒まず, 善意のボランティアを歓迎
- ◆ どこにも手本のない誌面づくりを基本
- ◆ 自分で接触した生体験の記事を基本

今, 振り返ってこのコンセプトを読んでも, 全部は達成されないまでも, ほぼ忠実に実行されているのではないかと思う次第です。本誌創刊から関係してきた者として感慨にひたるとともに, 皆様のおかげと感謝申し上げます。今年は是非, 我が国の宇宙開発も大いに元気を取り戻して欲しいと願うとともに, 引き続き SJR もよろしくお願いいたします。

植田 剛夫

いつもスペース・ジャパン・レビュー誌をご愛読頂き誠に有難うございます。

今年早々のトピックは、まもなく H-IIA の打ち上げが再開されることで、関係者各位のご努力で万全を期してこられた成果が、無事成功をもたらしますよう、心よりお祈りする次第です。種々行われてきた改善活動の中で、特にプログラムのシステムマネジメントを強化する動きが本当に徹底されて、「災いを転じて福となす」アクションが取られたことを期待してやみません。

本誌も毎年の課題ながら、何とか読者各位に喜んでお読み頂ける記事を増やすことを心がけています。衛星通信をはじめ宇宙開発利用技術の開発やビジネスに携わっておられる各位の業務に、少しでも直接お役に立つことができる雑誌にすることが願いです。

北爪 進

新年明けましておめでとう御座います、日頃 SJR 御愛読有難う御座います。

昨年は台風、地震、津波など自然災害の厳しい年でした、新年はこれら禍を福に転じて前進する年となる事を祈願致します。

スマトラ沖地震による津波の被害は驚異的な数字になっています、これも災害警報システムの不備が大きく影響しているとの指摘があります、昨年宇宙開発を日本一国の問題ではなく広くアジア・太平洋地域、全世界レベルの問題としてアジア・太平洋地域での宇宙開発協調体制の確立を提案しましたが宇宙開発技術の地震・津波警報、災害警報の為の観測、通信網の確立への応用のために役立てる必要性が実感されます。

日本の宇宙開発は一昨年来 H-IIA の打ち上げ失敗により停滞していますが本年はこれらを払拭し新たに前進しこれらに貢献する事を期待しています。

志垣雅文

本年もよろしくお願ひ申し上げます。

今年は昨年にもまして「スペース・ジャパン・レビュー」誌の記事を充実したものにしていきたいと思ひます。本業界の動きなどが分かりやすい形で記事にできればと思ひます。また、新しい分野の記事なども増やしていきたいので、読者諸氏のご協力をお願いいたします。

最後に本年も皆様にとりよい年でありますように祈っております。

上羽正純

N-I ロケット1号機により、技術試験衛星 型(きく1号)がうちあげられたのが、1975年(昭和50年)、今から丁度30年前です。以来通信衛星を含め人工衛星に関する技術開発及び事業は飛躍的な進展を感じております。本年は、H-IIA が再開され、日本の技術試験衛星及び実用衛星が着実に日本の空に上がることを期待するとともに、衛星通信に関しても新たな展開を起こすため、微力ながら貢献させていただく次第です。